

# 文化高知 26

## サービスの心

岩崎 令子

三遊亭金馬師匠がかつて私にこうおっしゃった。

「岩崎さん、あなたも苦勞されたそうだが、苦勞の顔がいつまでも残らんように生きなさいよ。私は落語家ですが、落語家は人を笑わしてお金をいただいている商売だから、この話をどんな顔をして、どんな語り方をすれば、皆さんにわかってもらえて笑いが出るかな、と鏡をみて目口してみたり、誰もいないのに語りかけたり。高座に毎日上つていても、毎日が新しい仕事で、一生懸命に稽古をします。落語家も人間だから、辛いこと、悲しいこと、腹のたつこともありますよ。でも、それはお客さまには関係のないことで、お金を頂くとプロです。『ああ面白かった、つらさがいっぺんに吹き飛んだ』とか『笑いながいらい勉強になった』と、また来て頂くのが落語家の使命なのです。だから岩崎さんも、どんなに辛いこと、腹のたつことがあってもお客さまには関係なし、いつもにこやかな応対がサービス業でしょう」

全くそのとおりで、肝に銘じて忘れられない有難いご注意である。

以来、努めて笑顔づくりを意識してやっているうちに、いつの間にか自然に顔がほころびて笑顔になる。習慣は、人が作ってその習慣に縛られて、改善



「青春(祭りの日)」 森本 忠彦

はなかなか難しいものであるが、幼い時からよい習慣の中に躰られた方は何となく奥ゆかしくて、字の如く自然に身が美しく品のよい方である。

したがって、言葉も同じように美し

い温かい言葉を選ぶべきで、『言葉』とかわれるように人間のみに与えられた文化である言葉は、人を生かしも殺しもするので、特に心して使わねばならない。歓迎の言葉の中に心がこもっているかどうかは態度や姿勢に表れる。

「国民休暇県高知」を宣言して、今や高知県民挙げて、それぞれの立場でリゾート作りに村おこしに、観光客受け入れに官民一体となって取り組んでいる時、旅館、ホテルや観光産業に携わる方々は大変重要な役割を担っている。園芸産業に次いで観光は県の基幹産業として大きな期待がかけられている。

瀬戸大橋ブームで、高知県も観光客が大幅に増加し、全体的に活気づいている。外貨とも言うべき観光客が本県に落としてゆく貴重なお金は、旅館、ホテルだけでなく、土産物をはじめ食品、交通等あらゆる業種を通して県民全体の生活を潤している。このブームが一過性に終わらぬよう、受け入れ側の私たちみんなが温かく歓迎したいものである。

(高知グランドホテル社長)

私は土佐が好きである。今も、年に一度は必ず田舎に帰っているし、帰ることにしている。高知までは、飛行機に乗れば一時間二十分ほどで到着する。それから田舎までが遠い。しかし、青き輝き、エメラルド色に見える、黒く光る海が見える。奇観に富んだ美しい海岸線、清い川の流れ、濃緑に迫る山々、ああ、わが心のふるさと」と叫びたくなる。帰ってきたんだと心の安らぎを感じる。「田舎も変わった」と人は言う。表面的には変わっているが私の心のふるさととは変わらない。

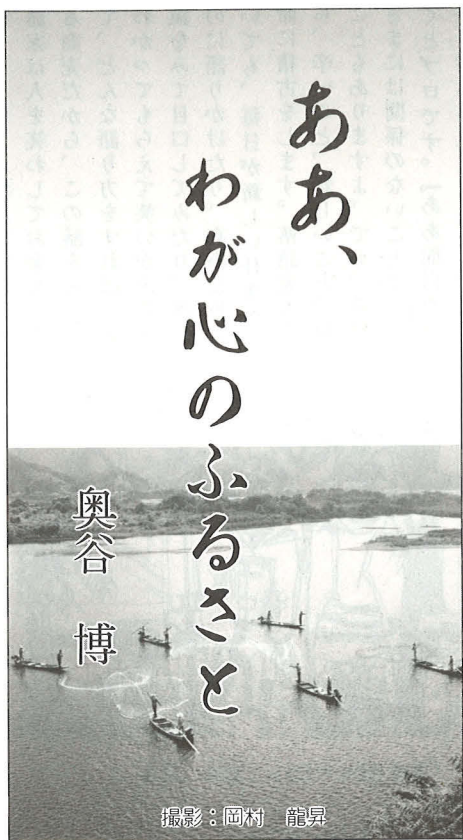
私は、高校時代までの二十年近くの歳月を宿毛（現在の宿毛市）で過ごした。今では三時間半もかければ行ける高知市も、当時は、宿毛を朝五時の木炭バスに揺られて久礼坂を登り、下り、窪川でバス停から国鉄の駅まで走り、汽車に乗り換え、夕方薄暗くなりかけた頃、ようやく高知に着く交通状態であった。高知に降りる頃は、身体は疲れ切り、顔は汽車の煤煙でまっ黒であった。

そのような時代であったから、二十一年間に高知市に出かけたのは二回ほどだと記憶している。それも、蓄膿症で高知まで出かけるのであるから、あまり嬉しくもなかったが、いろいろな景色が見られるのは楽しみであった。

都会の高知市に降り立った時には、十数年後に文化庁の芸術家在外研修員としてパリに出かけた時よりも、見るもの聞くものすべてに感激した。高知のチンチン電車に乗れるのがなんだか大変嬉しくて、蓄膿症なんか忘れてしまった。高知城も、天守閣と追手門の対照がみごとで美しい、松や樹木の間より垣間見える石垣も

ああ、

わが心のふるさと



撮影：岡村 龍昇

美しい、こんなところで戦ったのだろうかと眺めた記憶がある。

私の生まれた宿毛には松田川という川があり、松田川を挟んで市街地を対岸に望め、後ろは荒瀬山がある。この松田川には満潮になるといろいろな海の魚が潮ののって上ってきた。この川が自分は好きである。

高校時代までの夏の遊びの半分はこの川にある。潮が満ちているんな

魚が上ってくると川は活気を生み出す。その魚の上つて来るのを川辺で見ていると飽きることが知らない。潮にのり、小魚が何千匹も一列に並んで上つて行く。大きなのが餌を漁りながらのりくらりと上つて行く。何日も日照りが続く、鱒が背を出して浮かんでいたり、時には鱈も上つてきた。この満潮と引潮に釣竿

奥谷 博

を下げると魚がよく釣れた。全ての魚が眠りから覚めたように、休んでいるところから出て来る。釣れる魚は、沙、鮠、ちぬ等、いろいろ混ざっている。満潮の時には小さな河豚が何回釣糸を下げて釣れた。

この河豚には閉口した。釣糸を下ろすと釣れる。「ちきしよ、また河豚か」と、マッチ棒で河豚の目を一文字に突き刺す。クツクツと

泣き声を出している。目刺しのようにして泳がせた。河豚は目が見えないから、ぐるぐる回りながら白い腹を裂けるほどふくらまして泳ぎ回った。

ある日、マッチ棒を目に突き刺された河豚が潮に乗り上つてきた。僕のいたずらか、それとも近くの釣りの仕業かわからないが、その姿を見て、悪いことをしたと感じ、かわいそうだと思った。すぐマッチ棒を抜いてやることにした。自分は、嬉しがり、すごい勢いで泳ぐ姿を想像して胸を躍らせた。河豚はしばらく腹を上にして泳いでいたが、そのままのびてしまった。それから絶対にはそのようなことをしなかった。

今、何十年か経って考えると、何と残酷なことをしたものだろうかと思うが、話を聞いた友人は「それが青春というものだ」と言った。私は自然に恵まれた土地で育ったことを本当に幸せであったと思う。四国南端の海と山に囲まれ、太平洋を見て育った自分は、本当の自然の大切さがわかる。「最後の清流」と言われる四万十川と豊かな本場の自然を持つ土佐、この自然を大切に我々は生きねばならない。

洋画家  
独立美術協会会員

があ  
があ  
ちゅう

——土佐弁の思い出——

岩原 雅子

「へんな言葉」  
小学校に入学してすぐ、隣の席の女の子がまるで悪事を責められてるようになり、私に土佐弁を非難した。「そんな言葉使ったって誰もわかんないわよ」

この、ソウル五輪女子体操で個人総合優勝を果たしたシユシユノワ選手のように目も鼻も口もツンと上を向いた女の子は、目も眉も情けなく八の字をかいて、私が余程気に入らなかつたのか、二学期の席替えの時までどこか私を下に扱った。彼女の名前は「英」京子」といった。

父の転勤で群馬県前橋市の小学校に入学した時の話である。私は高知に居た時から病気がちで、幼稚園もほとんど休んでいたせいも他の同年の子供に比べておかしいくらい頭も動作もゆっくりとした所があつた。その私が、「……ちゅう」や「……があ」と喋るのだから関東言葉で育ってきた彼女には何とも間が抜けて

聞こえたのであろう。そのおかげで私はしばらくの間、ガンとしてもを言わない子供であつた。

それでも子供ならではの変わり身の早さで、あつという間に土佐弁を忘れ、利根川の水が余程身体に合ったのか驚く程の健康体になり、二年生に上がる頃には私は自分のメンコ入れを持ち運ぶ子分さえ従えるようになっていた。そしてその後も学年が上がる度にイタズラの質を上げてゆき、担任の先生方を随分手こずらせる子になっていったが、とうとう六年生で帰高する最後の最後まで、「英」京子」女史には妙に頭が上らなかつた。

群馬県は今、埼玉・千葉を抜いて田舎のイメージNo.1を誇っているが、やはり関東の仲間なのか、その当時から言葉は「ジャンジャンサー」を使っており、かなりのお年寄りでもないかぎり上州なまりは使わなかつたから、私も小学校六年生にして立

派に「ジャンジャンサー」を身につけての凱旋となった訳である。

出発の日、駅のホームで仲良しだった友達から「本州出るんだね」と涙ぐまれ、私もすごい田舎に連行されるような不安に胸を潰しながらそれでもホームいっぱいのみごとを見送りに愛想よく手を振り、我が家は第二の故郷を後にしたのである。

高知に着いてすぐ、テレビのチャネルが四つしかない事に絶望しながら引越し荷物をほどこいて、つけたばかりのテレビからものすごい土佐弁が聞こえてきた。その当時はまだテレビに出る事がひどく晴れがましい時代だったから、これが電波に乗っていいものかと思われるような、向う三軒両隣のおばさんや子供が全くの普段着で電気屋さんの前に勢揃いしている姿はもうそれだけでおかしかったが、テーマソングが終る頃、その店の奥さんらしい人が

「レコードもそろおちゅうぞね」と一言付け加えた。とたん、帰郷ホヤホヤで自分が土佐人である事などその時は全く意識の外にあり、いい気になって「ジャンジャンサー」とまくしたてていた軽薄な私達一家は、部屋にあふれる引越し荷物をかきわけながらのたうちまわって笑っていた。

自分がこの言葉で六年前に恥ずかしい目に逢つた、喋りづらいつい思いをした、仕事にも微妙にさわりがあつた、父も母も姉も私もみんな口には出さなかつたが、大かた少なかれ不都合な思いをした事が、二つ三つの小石のようにその笑いの底の方にころがっていたのかもしれない。

それから十六年余、多少の出入りはあつたものの、やはり生まれ初めて最初に覚えた言葉は心地良く、私はずっと「があがあちゅう」の中に安心して身を置いている。

あれは昨年の秋である。旅の途中で柏崎の駅にフラッと降り立った私は、その夜の宿を決めるべく駅前の小さな旅館の戸を開けた。薄暗い玄関には小学校低学年くらいの女の子が一人留守番をしており、私が「お父さんかお母さんおる」と聞くと、その子は急に真っ赤な頬をより紅潮させ「キッ」と私を見上げるときつい目顔で「ナニ？」と問い返した。一瞬ひろんだ私は

「お父さんかお母さんいる」と言い直したのだが、あの時のあの子の面差しはそのまま二十年前の「英」京子」女史であつた。

ちなみに「三ツ児の魂百まで」と言うがそのせいだろうか、私は今だに英雄や英明にきれいださつぱり縁がないし、英語も全く駄目である。

# 地域に根ざした伝統と個性—— 土佐の神楽面を打つ

谷 清浄

一芸を深く極めた人たちが、古くから、その努力や心境を様々な言葉で表現している。そういう名言や言い古された言葉に、面を作るという人間的労働の中で、「ああ、あの言葉はこういうことを言っていたのか」という風にめぐり合い、認識してゆくことがある（私が一芸を深く極めているなどという意味ではなくて）。

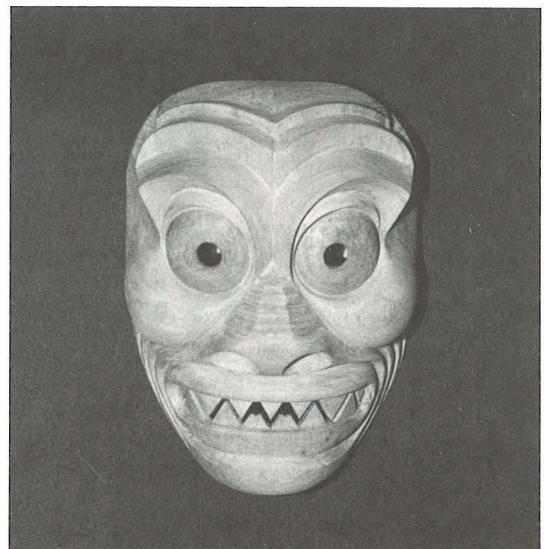
例えば、面を作る工程の中で、目を彫ったり、毛書きをしたりする要所の作業では、息を止めて一気に進めなければならぬ。そういう作業の後には非常に疲労感と虚脱感がやってくる。このような状態について、私は最近「精魂をこめる」ということはこのような状態を言っていたのか……と気づいた。でも、いや、それだからこそかも知れないが、そういう緊張と集中力を要求される工程を経て面が彫り上がった後、或いは塗り上がった後に味わう、開放感というか、寛いだ気持ちはすばらしい。私はこの「ものを作り上げたよるこび」とでも言うべき感慨に深くひたって味わうことにしている。食卓にできあがった面をおいて、それを眺めながら、グラスや盃を傾けるのである。

作ることができないのではないだろうか、という不安におそわれることがある。これはどういう心境なのかよく解らない。他の人はどうなんだろう。

ご存知の通り、高知県下十カ所に継承・保存されている神楽が、昭和五十五年に一括して「土佐の神楽」として、国の重要無形民俗文化財に指定されている（そのあたりのことは高木啓夫著『土佐の芸能——高知県の民俗芸能』に詳しい）。

私は、資料集めのために、神楽の保存されている各地を訪ねた。神楽の保存、或いは振興という非常に地味で息の長い活動をしておられる人たちにお逢いした。快く資料集めに協力していただき、親切にしていた。そして、保存会の人たちの神楽の保存に取り組む真剣な姿勢に感銘を受けた。

西部のある地区では、伝承されていた方が亡くなられ、その遺族の方が衣装と面を保管されていたが、遺族の方が地区を離れている間に、何



本川神楽 『しかみ』

者かに持ち去られてしまつて所在が分からなくなつてしまつていたり非常に残念な状態もお聞きしている。各地に保存されている神楽面には、随分古いものがある。本川神楽では、『山王』の面に貞享二年（二六八五）と彫られている。この面の作者は地元の人らしく「土佐桑瀬ノ内かざらばば・川村」との銘も見られる。また、古い『般若』面には「土州住・岡本姓藤原政則作」の銘がある。

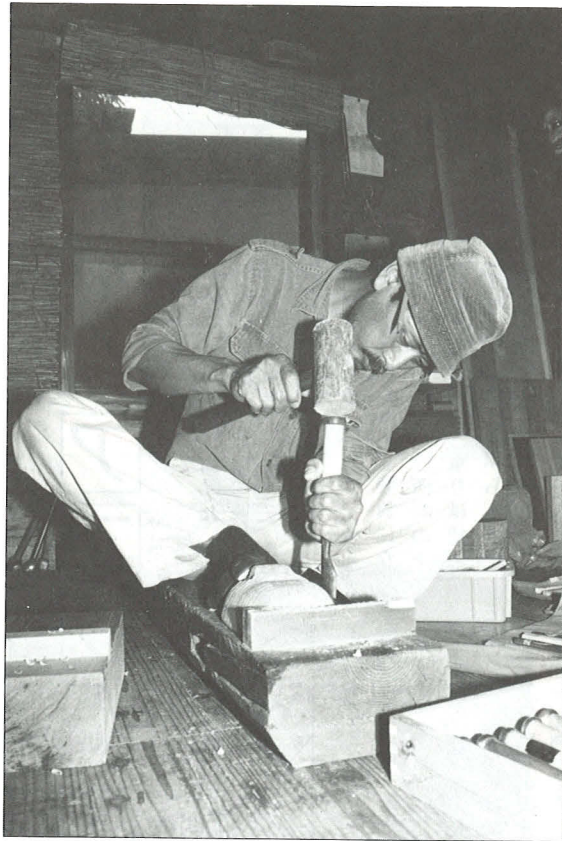
永渕神楽にも年代の彫られた面がある。一つは『爺』と呼ばれている面で、延宝（一六七四〜一六八〇）と読める。もう一つは『婆』と呼ばれている女面である。こちらの方は塗りの胡粉が所々はげ落ちていたりし、木

地の一部が欠けていて、相当古いものらしいということは一目で知れる。この面の裏に「天安二年」と彫られている。私は、日本の古い年号に詳しくないし、その時は面裏を見て、ただそれを書き写しただけであり、記憶も認識も残っていなかったが、帰ってからその年号を調べてみると、天安二年というのは西暦八五八年で、平安時代であることが分った。

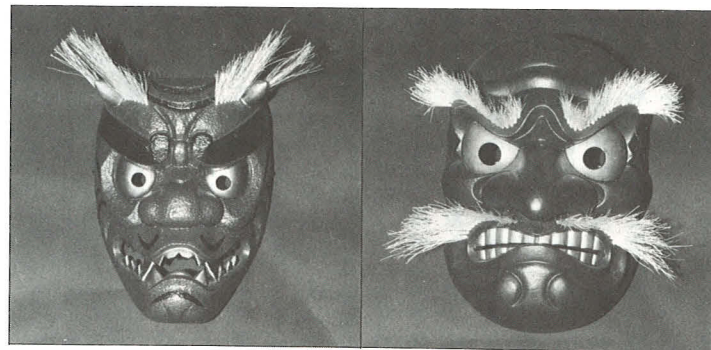
一方で、頭にかぶる形で大きなものであった。「かける」と表現される薄型の能面が作り出されたのはいつの時代かよく知らないが、一二世紀末の鎌倉時代には、能面がその型をほぼ完成させていたと考えて間違いないのではないか。では能面型の薄い面はいつごろから作られるはじめたのか。永渕神楽の『婆』の面は薄い能面型である。

う一度、彫られている文字をはっきりと確認し、同時に本当にその年代に彫られたものかどうか調べてみたいと、当時から考えているが、未だに実行できていない。或いは、そのままにしておいた方が良いのかも知れない。その方がはるかにロマンに富んではいるのだが……。

今年六月、機会があつて個展のようなものを開くことができた。会場に見えられて土佐の神楽の面を見たある人が、後日、「ローカルなものには即ちインターナショナルなものだ」ということを感じた」という意味の感想を述べられた。これは勿論、私の作品に対する批評ではなくて、一つの物の見方というか、受け取り方だと理解するのだが、つまらないものからでも、その人の知性の度合いに応じて優れた受け取り方ができるということを示す例ではないだろうか。この言葉を私なりに解釈すれば「地方の片田舎に埋もれているものでも、その地域に根ざした伝統と個性に貫かれていけば、それは即ち世界に通用する個性とすることができるとはならないか」ということになる。この言葉には大変含蓄があると思つたし、感銘を受けた。また、この人の思考というか、言葉というかが熟していることにも感心した。



私はこの言葉が「ずん」と気に入



『大蛮』 津野山神楽 『鼻高』

った。この言葉を自分の身近においておきたい気持ちが働いている。勿論私にインターナショナルなものを作る能力があるとは考えられないので、この言葉を目標とすることはふさわしくないようだが、「あこがれ」とする分には別段差し支えはなさそうだ。私は、「ローカルなものは即ちインターナショナルなものだ」という言葉をあこがれとして、今後共、面の製作に精魂を傾けていきたい。

（神楽面作家）

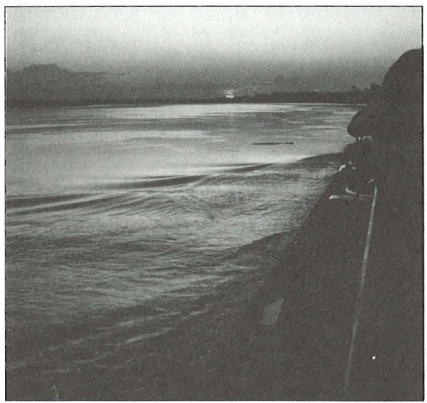
# ビバ！アマソナス

山崎 啓一

## II. 魚を撃ちに行こう

南米での楽しみは、フィエスタと呼ばれる夜明けまで続くパーティーと狩猟と釣りである。アンデスで水資源調査をしていた時には、同行のテロ対策特別部隊の隊員達と湖で自動小銃を連射してカモ狩りを楽しんだが、ここアマゾンでは釣りに興じた。

船の停泊地ごとに、鶏の切り身をエサに三十cm程のナマズを釣り、次はそのナマズを生き餌にして大物を

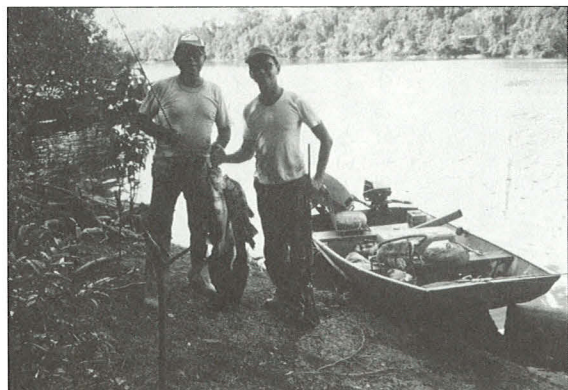


狙ってみるが、二十号の糸ではとても勝負にならなかった。しまいは径四mmのナイロンロープを道糸に、重りは使用済みの単一乾電池を三個ぶら下げて（アマゾンの河原には砂利がなくて重りにする石ころが採れず、民家で乾電池をもらってきた）、たそがれの河面にエサを下す。時合も良くすぐにひたたくような大きな当たりがあり、合わせをくれる間もなくどんどん道糸が出ていく。一人では引きずり込まれそうな衝撃に恐怖が走り、顔が引きつってくる。思わず「助けてくれ！」と叫ぶと三人の乗客が助っ人に加わってくれた。ふと気が付くと周りはすっかり夜の帳に包まれ、さしもの強敵も中層まで浮かんできた。ロープを通して怪物の荒い息遣いが伝わってくる。ここまでくれば楽勝だ、思わず四人の顔がほころび、豪勢な夕餉を思い気が緩んできた。しかし、そこは百戦錬磨の強敵である。われわれの気

の緩みに付け込むかのように強引に浮いてきたかと思うと、急遽反転し底へ突っ込んだから、さすがの太いロープもたまらず悲鳴を上げ一巻の終わりとなった。

すっかり消耗したわれわれは、ロープの切れ端を肴にカニヤッソ（キビ焼酎）を回し飲みしながら「おかしさを逃がした……」と吠え続けた。しかし切れてよかったのかも知れない。実際アマゾンではとてつもない大物を掛けたものの、ロープに手足がからまり引きずり込まれて死んだ人が多いそうである。

ここで、アマゾンの大魚を紹介しよう。ナマズを代表するスルビンは最大体長四m・体重二百kgまで育ち、大人も入る大口でバキューム・カーのようにエサを吸い込むようだ。上品な魚の代表はピラルクー（パイチエとも言う）で、体長三m・体重百五十kgになり、靴ペラ大の鱗に覆われた魚体は怪しいまでに赤く輝き見



事である。この魚は美味なることでもアマゾンでは最も人気があり、大物を一匹獲ると一週間は寝て暮らせるといふ。魚肉は塩漬や干物に、臓物はバーベキューに、鱗はヤスリに、舌はオロシガネにと極めて有効に利用されている。

私のアマゾンでのベースとなったイキトスの街ではスラム街に友人もできて、彼の家に居候を決め込み日系二世のカルロス松藤さん（彼の父はアマゾンにコシヨウ栽培を広めた功労者で、兄はペルーの政商として有名）やイキトス大学教授のリカルドさんと知り合った。

ある日、カルロスさんとリカルド

さんが秘密の山上湖へ連れて行ってくれるとお誘いがあり、گرامン社製のカヌーに乗り込んだ。支流を進み倒木で遡行できなくなった地点から、カヌーと船外機を肩にジャングルのトレールをたどり目指す湖に着いた。岸より湖水までの三十mほどは沼地になっていて、カルロスさんが聞いてくる。

「ケイ、君には子供が有るのかえ？」  
「女房は一人しかないが、子供は二人おるよ」  
「後こさえるつもりはあるかえ？」  
「二人で上等。これで打ち止めよ」  
「沼の寄生虫で子供がでんなるかもしれないが、打ち止めやったらかまらう。ほいたら行こう」

危険な会話を交わし、腰まで沼につかってカヌーを押す。  
気味の悪い沼を抜けるとそこは豊饒の湖、二人が秘密の場所というだけあって、あちこちから強者が弱者を追いかける弱肉強食の水音が聞こえてくる。水音がけてルアーを投げると、オニカマス、大ピラニア、アストロが面白いように釣れる。本当はアマゾンの華といわれているツクナレ（ピーコック・バス）を狙っているのだが、今日の本命は機嫌が悪いようだ。それでも豊かな自然の恵みに心は満たされ、振り返るジャングルの中ではモロフォ蝶がネオンのように怪しく輝きながら飛び交い、とてもこの世のものとは思えない。

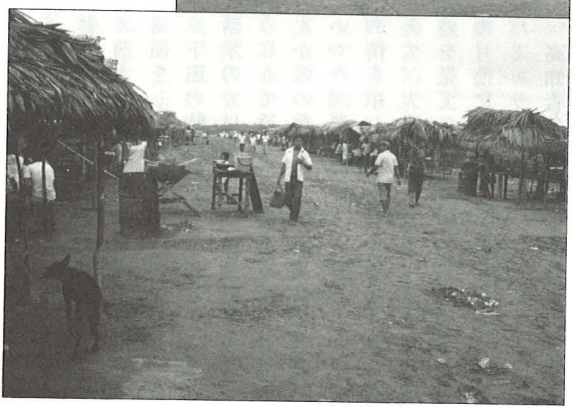
危険・強暴が代名詞として似合いそうなアマゾンのジャングルにこのよつかずの場所だからこそ最も寛げるのではないだろうか。

翌日は本命のツクナレをと船外機を二基掛けにした本格的なモーターボートで本流の三日月湖へ遠征する。三日月湖は本流の屈曲部だった所が大水等により流れの筋が変わり、取り残されて出来た湖で、本流より切り離されて二三年で褐色だった水は澄みきり、本流よりも甘い水となつて多くの魚を育んでいる。朝もやの本流を進んでいると流れの中から「ドボン」と丸太を放り込むような重量感のあるスルビンのジャンプする音が聞こえてくる。魚もこうなると獣のように鳥肌が立ってくる。本流と湖を結ぶ細流をブッシュを払いながら進むと、底まで見えるほど澄みきった湖へ着いた。

リカルドさんはここで舟を降りて二十口径のカービン銃を背に木登りを始めた。何を撃つのか聞いてみたがニヤニヤ笑って答えない。カルロスさんと私はボートよりキャスティングしながら湖を回る。倒木すれすれにルアーを引くと脳天まで突き上げるような手応えが返ってきた。ヤツは底へ底へとダッシュを繰り返した後、頭を振りながら浮いてきた。



アマゾン流域の町レケーナ  
右、教会 下、市場  
近代的な建物と素朴な市場との対比  
がおもしろい。



ギラリと黄金色の輝き、夢にまで見たツクナレだ。あまりの美しさに見とれているとジャンプ・ジャンプの繰り返しで素晴らしいファイトを見せてくれる。慎重にネットにすくいこみ手に取ると砂金のような雫がこぼれてくる。やったあ！十二ポンドのトロフィーサイズだ。それもピーコック・バスの名に恥じぬ見事な魚体である。応援してくれたカルロスさんと握手を交わし喜びを分かちあう。ありがとう、アマゾンの精よ。その後もキャストイングとトロリングを続け、今夜のパーティー用の魚をキープした。

対岸からは時折ライフルの音が響いてくる。なんとリカルドさんは木の上で銃を構え、浮いてきた魚を狙っているのだ。それも撃った魚が沈まないように魚の浮袋をさけて頭部を狙っているから、魚の大きさもさることながら、腕前もたいしたものだ。昼食に集合して獲物を見せ合い自慢話に花を咲かせた。

山上湖といひ三日月湖といひ、毒蛇たちに守られた聖地は本当に豊かで平和な所である。（地方公務員）

お詫びと訂正  
25号でアマゾン川の流域面積630kmと書きましたが630万kmの誤りでした。お詫びして訂正いたします。



# 学習・生活 etc.

沢田 智恵

※ 二年生・女

「一、二、一、二」声をかけ合い 列になって走る  
クラブのランニング  
じょじょに声が小さくなるのがわかる  
みんなに遅れまい いえ、負けたくない  
何よりも自分に勝ちたい  
そう思い込みながら、四月からずっと走ってきた  
くじけそうな時もあつたけど  
寒い日の体育の授業  
去年と同じコースで同じ距離  
去年まではピリを走っていたのに今年は違っていた  
私のあとに人がついてくる  
前を走っている人のタイムを聞いて仰天した  
この種の詩は、格別目新しくはないが、この作者が吹奏楽部でフルートを吹いており、しかも秋口にはひどい

喘息に悩まされていた女生徒だとすると、やや趣きが違ってくる。  
二年生の修学旅行の時、第一日目の旅館で夜具の匂いにむせて発作を起こし、数時間ひどく苦しんだ。そのあまりの激しさに私自身うるたえそうになりながら、「Y子さん、あなたの一番楽な姿勢になって頑張つて」と背中をさするのが精いっぱいだった。すると、「先生、すみません。普段よりはずっと楽な方ですから心配せんとつて下さい」と苦しい息の中からこう言うのだった。とにかく猛烈な頑張り屋なのだ。フルートを吹くための体力をつけるために、毎日お城の石段を駆け上り、雨の日も風の日も一日たりとも欠かしたことがなかったという。自分の生来のハンディーを自力で克服したいという思いが、詩の中では「何よりも自分に勝ちたい」という表現に込められている。古めかしい格言ながら「成せば成る」「継続は力なり」の教え通りに努力する生徒であった。

### 比較

※ 二年生・男

ばくはいいつも親と比較される  
「あんたのお母さんを見てみなさい……」  
とパターンが決まっている  
ばくと親の差が大きくて説教がともしみる  
いつになったらこの差が縮まるのだろう  
これからも 親の「がんばり」という壁が  
ばくの前にたちはだかりそう  
この壁をいつかは越えられるだろうか  
今度はまた母が「看護婦学校」に入りなおすそうだが  
ああ、また壁が一段と高くなってしまふ  
親と子の心の繋りがあれば、子どもを励ますのに言葉は不要かも知れない。年齢にこだわらず常に前向きに進

もうとする母親の生き方に、O君は子としての多少のあせりを感じつつも敬愛していたのであろう。口数の少ない子であったが三年生になったある日、「先生、ぼく高校へ行けるだろうか」と放課後そつと問いかけてきた。「大丈夫、行ける行ける。君はこんなにまじめで努力家だもの」と背中をとんと叩くと、安心したように少し笑った。  
「今日は学校で勉強していてもえいろうか、ぼくが戸締りをするから」と言って、机の上にノートを広げて一心に漢字を書き始めた。新しい漢字を一ページずつ書こうとしているのだった。(あれ、間に合うかな、この調子で)という正直な思いがちらつと私の脳裏をかすめた。O君は亀さんなのである。こつこつと根気よく努力するタイプなのであったが、内向的で緊張感が強かったから入試となると気がかりであった。  
因みにO君は無事高校に合格できたが、正直者が馬鹿を見るような結果が教育の場において断じてあってはならない、と私は堅く信じている。

※ ※

数年前の夏休みの登校日、学年主任の先生がいきなり私にこう言った。  
「沢田先生のクラスのN君が髪を真黄色に染めて、宝町を自転車で走りよつたけんど」  
「えつ、茶色じゃなくて真黄色ですか?」  
「そつ、真黄色!」  
さすがの私も度肝を抜かれた。もちろんN君はこの日欠席だった。  
家庭連絡のつかないまま九月一日を迎えた。教室に入つて真っ先にNの頭髪を見ると、むらむらの濃茶色である。いかにも態度もずさんで見える。三年生の夏休みは、進路に関して重要な時期であることは、みんな百も承知

のはずである。私は全身怒りの塊となつてどなり散らしてしまつた。ふと見ると、Nの両手の爪が黒ずんでいる。はつと思ひ当つた。そうだ、Nはおそらく昨夜、自分の手で頭髪を濃茶色に染めかえたのだらう。二学期の始業式に備えてNなりの努力をしたのだらう。一瞬の間にこれだけ見てとると、私は一層自身を持ってNを叱りどばすことができた。放課後、同じ班の仲間五人を残してNを囲み、「ほんとうの友達ならN君に本音で注意しちゃう」と訴えてみた。しばらく黙つていた五人は、「ちよつとやりすぎ、目立ちすぎる。高校へ行きたいがやつたら、ちゃんとしよ」などと心をこめて言葉を発してくれた。翌日は清々しいスポーツ刈りで登校してきたNは、別人のように表情が明るかつた。  
「先生、ありがとうございます。親のようせんことをして頂きました」と母親から涙声の電話がかかつてきた。「いいえ、教師として私のできないことを生徒たちが助けてくれたがです」

失敗を重ねる子、誘惑に弱い子、考えの幼い子等を持つ親の心は切ないものである。頭髪違反一点についても、その背後に親の泣き顔、必死の思いが浮上して見える。「先生がおればつかり目のかたきにして注意する。あの先生、好かん。うつとうしよ」

「何を言ひゆうぞね。四十数名も生徒がおる中で、あんな一人にそれはあ注目してくれる先生がいて幸せやいか、先生に見放されたらおしまよね」  
みごとなお母さん。ただ敬服の念を抱くのみである。  
(高知市立城北中学校教諭)

「中学生、それぞれの時」沢田智恵先生の担当は今回で終了いたします。有難うございました。

## 応援して下さい RYOMA

◆「ミュージカル・RYOMA」の出演者でつくる『劇社中・はんどれつど』の結団パーティーを左記の通り行います。市民の皆様を激励と祝福を賜りたいと致します。  
①日時 11月15日(火) 午後6時半  
②場所 城西館太陽の間  
③会費 五、〇〇〇円

主催●高知市文化振興事業団 制作●ミュージカル龍馬制作委員会

今井正監督作品上映会

## 『真昼の暗黒』 『にっぽんのお婆ちゃん』

日時：11月7日(月)午後5:00~9:02  
場所：あたご劇場  
料金：前売1,500円  
主催：高知シネマクラブ  
共催：高知市文化振興事業団

## これなくして民権は語れない

自由民権百年第三回全国集会記念出版

## 土佐自由民権資料集

外崎光広編 A5判 344頁 定価3,000円

土佐自由民権の基本的資料を事件別に分類・収録し、原資料により各々の事件の実態が把握できるように編集した資料集。原典により民権を知ることができる。

最新刊●高知レポート4

## 土佐の自由民権運動

外崎光広著 A5判 156頁 定価1,000円

自由民権学界にある土佐自由民権に対する誤った見解を正し、その発生要因から役割まで体系的に明らかにした。土佐の民権運動を正當に評価した初の書。



## 高知卸団地(南久保)

南北の中央路と、1番街から4番街までの東西の各街路があり、高知の有名卸商社が軒を並べております。以前は湿田で、夏になれば一面緑でしたが、その緑が今、形を変え「街路樹」として残されております。

## 私の風景

小松 将勲

## 特撮映画製作裏話

甲藤 雅彦



私の主宰する甲藤プロダクションは、高知をベースに活動する特撮映画自主製作グループである。昭和四十四年、二人の高校生が見様見真似の技術と中古のゼンマイ駆動式カメラだけを頼りにスタートさせた自主製作も、十八年の歳月と二十本余りの作品を経て、何とか映画らしい映画を完成するまでになり、新作「大魔神復活」(90分、出演三朱雅子他)は、各地で上映され好評を得ている。(高知上映は十二月四日)

現在、スタッフは、十二名。その誰もが今の低迷する邦画特撮に対して歯がゆさ、物足りなさを感じており、「プロばかりに任せちゃいられない。自分の観たい映画は自分で作ってしまおう」と意気盛ん。日夜、新しい映像に挑戦中である。その製作風景を紹介してみよう。

撮影スタジオは、高知市内の閑静な住宅街の一角、約三十坪の鉄工場跡に設けられている。スタジオ内は、食事の間も惜しむスタッフが所構わず道具を広げて作業する為、その雑然とした様子は、子供の工作室の域を出ない。

無数の工具、材料の中には、歯科用材料、水道工用工具、百缶以上にも及ぶ塗料、ラテックス成型の為の料理用オーブンなども見られる。

歯科用切削器具が、歯科診療所を連想させるカン高い金属音をあげる中、レジン削片にまみれて戦車の砲塔を成型するスタッフ。怪物の石コウ型に異臭をまきながらラテックスを注入するスタッフ。ミニチュアの高知城に必要な千枚の瓦を一枚一枚でいねいに造型するスタッフ。実在の商店街をミニチュアセットに再現するため、その設計図通り、看板から商店のディスプレイまで精密に作ってゆくスタッフ。

これらの準備は、映画ワンシーンあたり数週間、時には一ヵ月以上もかかる気長い手作業である。ようやく組み立てられたセットは、綿密なカメラテストの後、撮影本番を迎える。

某月某日。撮影スタジオ。高知市街を破壊する大魔神の夜景シーン。街中に照明が点灯され、準備OK。スタッフが緊張する中、「本番ヨイ、スタート！」の声。高速度カメラが騒々しいノイズを出して回り、ビル谷間から大魔神が登場！

電線がスパークし、石こう製のビルが一瞬のうちに崩壊する。「カット！」スタッフが飛び出し、重い大魔神のマスクを脱がせると、中から汗びっしょりの役者が出てくる。

長期間苦勞したミニチュアはこうしてわずか数秒間でその役目を終える。撮影済みのフィルムロールは数日後、現像所から戻り、待ち受けるスタッフの前で試写される。幸運にもOKの場合は、拍手喝采を浴びるが、不幸にもNGの場合は(どちらかと言えどこっちの方が多い)一斉に絶望のため息が上がる。NGは今までの血と汗の結晶をすべて徒勞に変え、再び数週間の準備が始まるのだ。

通常、六十分前後の長編には、十分から十五分の特撮シーンが挿入されるが、そのシーンだけで一年以上の製作期間が必要で、これにさらにドラマ部分がつながれて、やっと完成となる。

作品はこの後、各地のレンタルシアターなどで上映されるが、スタッフはその都度、飛行機で現地向かい上映活動をする訳だから、上映会の収支だけをとっても大赤字となる。しかし、そこはアマチュア。シナリオから上映までの色々な過程を楽しむことが本来の目的の為、大満足の中に幕は下りる。

特撮映画が作り出す夢の世界を追求する我々にとって、おとなになりきれないシネマ・ピーターパン・シンドロームはまだまだこの先も続きそうである。

(甲藤プロダクション代表)

「フラワー装飾技能検定」とは、生花を主体とした花材を用いて、ブーケ、コサージュ、贈呈用花束、籠花、アレンジメント等のフラワー装飾品を制作するのに必要な技能を対象とした技能検定です。何とか一級の資格を頂戴する事が出来ました。

しかし、労働大臣からの賞状を手にした時から大変です。今までは二級だからあまり難しい依頼は出来なくて仕方がない、と少々出来が悪くても自分自身に言い訳をしてきました。でも、一級になるとそうもいきません。気を使い、神経も使います。出来るだけ良い物を作ろうと考えると余計プレッシャーがかかります。

私の仕事場は本町の「フラワーストップOGGYA」にある「フラワーストップOGGYA」です。花のギフト専門店なので、誕生日や見舞いのアレンジ、コンサートや発表会の花束の作成、贈答用鉢物の包装等に毎日追われています。

一番難しいのはお客様がどのような花を希望されているのかを知る事です。そして、そのお客様の気持ちをどうすれば花

それぞれの仕事

**フラワー装飾技能士**

小松 美智子

に託す事が出来るかと言う事です。私達の仕事は、夢(花)を売る仕事なのです。私の作った花束やアレンジメントを手に入れた方が心なごみ、一時幸せな気持ちになつて下さった時、初めてその花に価値が生まれてくるのです。ただ花を形作ればよいと言つものでもありません。花束一つ作るにしても、何に使われるのか、お誕生日かお祝いかコンサートか踊りの発表会か、相手の方の好みは、かわいい感じが良いのか豪華な感じが良いのか、和風か洋風か、男性か女性か、年令は等々いろいろの要素を出来るだけ多くお聞きしながら、希望に添う物を作らせていただく様にしています。出来上がった花を見たお客様から「わあ、きれい」「ステキ」と言ってくると、つい嬉しくなるのを聞きしますと、つい嬉しくなると疲れも吹飛びます。

でも、急いだ時や不調で思う様に作れなかつた時などは、一日気が重くなりまします。しかし、くよくよしていても仕方ありません。次はもっともっと良い物を作ろうとガンバルのであります。

自由討究の精神

浜田 清次

高知日本文学研究会は、日本文学にたいする愛と研究意欲に燃えた同志が、昭和三十三年の春、相計り相結んでつくれた研究会です。同人の数は、現在のところ二十人にも足りませんが、みんな大学や高校の先生ばかりです。その研究対象は、古代から近代までの各分野にわたり、中国文学にまで及んでいます。研究方法は、各人各様、あくまでも自由討究の精神をもって真摯に学道、郷土の先哲、谷泰山や鹿持雅澄の研学のところを継承発展させることを念願としております。

毎年一回、機関誌「日本文学研究」を発行して、現在二十五号に及んでいます。これまでに発表せられた論文の数は、延べ百五十七編の多きに上り、中央の学界で評価せられたものだけでも、十編や二十編にとどまりません。さらにこの論文をもとに著書を出版した同人は、すでに十人以上を数えるに至っています。刮目すべきことではないでしょうか。

高知県下にも、詩歌や創作など文芸方面の雑誌は沢山ありますが、こうした研究誌、しかも、これほどに優れた業績をあげている雑誌は、おそらく他にほとんど類を見ないだろうと思います。いささか自負を禁じえないのであります。昨年で大きく三十周年を迎え、同人一同、一層の奮勵を誓っている次第であります。ただ一つの悩みは、新しい同人の参加

土佐史談会

土佐史を学ぶ殿堂

広谷喜十郎

土佐史談会の歴史は、遠く明治四十五年にまでさかのぼる。正式に土佐史談会として発足したのは、大正六年九月に機関誌「土佐史壇」第一号を発行してからです。定期的に機関誌を発行することにも、史跡探訪や講演会などを重ね、全盛期には会員数も千五百人に達している。その中から寺石正路、松山秀美、小関豊吉、関田駒吉、平尾道雄氏の秀れた多くの郷土史家が輩出して、学術的にも価値の高い論文を機関誌に発表している。

戦中から戦後にかけて、一時は休会状態であったが、やがて復活の動きがおこり、昭和二十七年七月に「土佐史談」復刊第一号を発行した。昭和三十年代も後半になると、平尾道雄、山本大、横川末吉、岡本健児氏の良き指導者を得て、会員が急激に増加し、郷土の歴史を見直そうとする人びとが多くなってきた。

機関誌「土佐史壇」は年三回の刊行で現在一七八号に達し、年一回の特集号を発行している。特集号は「考古学特集」「民俗学特集」「坂本龍馬特集」「自由民権特集」などを刊

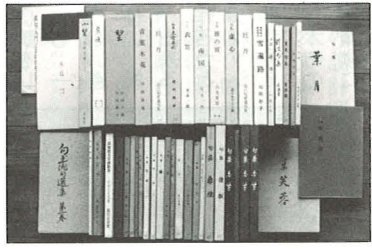


俳句会

初学むつかしからず

川田 朴子

俳論集「去来抄」の中で芭蕉は「発句は上の五文字からすらすらといひ下ろすのが上等の俳句である」「発句はものを取り合わせることでできるものである。そのよく取り合わせるのを上手といい、悪く取り合わせるのを下手という」と述べ、去来は「芭蕉門下の発句は、一字も読めない百姓や十歳以下の小児でも、時にはよい句を作る」とがある。ところが、他門の熟練者といわれる人でも、そのような発句は作れそうにない」と述べておられます。



近年、俳句の普及は想像を超えるものがあります。特に、女性にそれが見受けられます。結構なことですが、この機に俳句をお薦めしてみたい一言として、観念俳句でなく、説明俳句でなく、主観を従とした写生俳句こそ、むつかしくなく、学の要らず、倦きの来ない、そして尽きることの無い表現の広さのあることを御紹介したいと思えます(写生俳句には利口さや知識が却って邪魔をすることがあります)。天性の伸び伸びとした俳句こ

37の会

もつともつと芝居が見たい

宮地 郁子

「自分たちが生きていく上で励ましになるような素晴らしい芝居を、自分たちの手で高知に呼んで、みんなで観よう」37の会は、高知市民劇場の会員を中心に82年に発足しました。名称の「37」というのは、シェイクスピアの全戯曲が三十七本であることにちなんで名付けました。

82年「リア王」、83年「ジュリアス・シーザー」、84年「夏の夜の夢」(以上、シェイクスピア・シアター公演)、85年「太平洋ペルトライン」、86年「別れが辻」(以上、世仁下乃一座公演)、87年「浅利香津代一人芝居」影法師」と、ほぼ年一回のペースで東京から劇団を呼んで公演を主催しています。

87年、88年には、今、自分たちで出来る行動に積極的に取り組もうということ、で、反戦・平和を訴える朗読劇「あしたに生きる子どもたちへ」を構成・公演しました。

現在、会員は十五名ほどです。普段の活動はと言えば毎週木曜日に開く例会ですが、問題は



が極めて少ないということです。次代を担う若い優秀な学究の参加を、切望してやみません。



高知日本文学研究会代表  
連絡先 四七五一九三(浜田)

行し、その内容も一段と充実してきた。春と秋二回の史跡めぐりは探訪先の史跡などに詳しいベテランが講師となるので、毎回大盛況である。八月には親子のための史跡めぐりを実施している。さらに、八月に郷土史入門講座、十月に郷土史研究発表会も行なっている。昭和三十八年には団体として初めて県文化賞を受賞している。

土佐史談会事務局員  
連絡先 七二一六三〇七(県立図書館内)

そ人を楽しませます。

私達の結社「勾玉」の作風は、右に述べたことを柱にして自由闊達に稽古会を進めておりますので、途中で挫折される方もほとんどありません。俳句を生き甲斐にされている方が多いのに驚かされます。写真は四十周年を超した、個人句集稽古会団体のそれぞれに実を結ばれた記録の集積です。

勾玉社主幹  
連絡先 七二一五五二二(川田)

最近、高知の建築界を駆けぬけた大きな出来事がある。「自由民権記念館」と「坂本龍馬記念館」の二つのコンペ(競技設計)である。

伯風 コンペ 後日

結果の方は皆様もご存知のとおり、「自由民権記念館」は県外巨大事務所四社と県内有力事務所(県外から見れば弱小)四社の計八社での戦いになり、残念ながら県内勢は惨敗となった。しかしこれは、模様の出来の良し悪しが勝敗を決めたようにも思えた。一方、「坂本龍馬記念館」は全日本コンペになり、地元からも十九社が応募したが、最終審査前段の選抜作品五十点の中にも選ばれなかった。これはローカルの悲しさ、東京全

国的な情報の遅れと表現力、資金力の弱さで涙を飲んだ。作品についての評価はいろいろあろうが、入賞したものが必ずしもいいものとは思えなかった。

そもそも建物とは、設計者、建築主、利用者三者一体になってこそ、初めていい施設と言える。著名な建築家が設計した建物でも、今では見るに耐えないものはいくらでもあ

る。それだけに後の管理は大切である。建築家は、得てして自己陶酔の世界へ入ってしまい、その土地の風土とか気候等を無視しがちである。二つの建物はどちらも高知市に建つものである。我々は高知市民として、今後ともいい建物になるように応援もしなければならぬ。今後とも見守り続けていかなければならない。それ以上に設計者側も地元の人々に負けないくらいの意気込みと迫力がほしい。

ともあれ、二つのコンペに応募した地元建築士の熱意に拍手を送りたい。(遊)



江の口川はかつて、高知城北側、すべり山近付で南に大きく迂回していたが、大正十三年より3年間に亘る大改修が行なわれた。川幅を狭めて現在のような真直な水路とし、兩岸の河川敷を埋め立て、宅地として造成・売却した。現在、昔の堤防の石垣の一部が、高坂橋南詰東の西森建材店の車庫・庭などに残っており、昔の川の姿をしのぶことができる。



## 文化セミナー 「情報の仕事術」

「スーパー書齋の仕事術」「スーパー手帳の仕事術」「愛体少女文字の研究」などで有名な山根一眞氏（ノンフィクション作家）をお招きして、「情報の仕事術」というテーマで、情報管理のノウハウについて講演していただきます。

- 参加希望の方は事業団までお申し込み下さい。
- 日時 11月25日(金)午後6時30分～
- 場所 高知グリーン会馆2階ホール
- 講師 山根一眞氏
- 参加費 千円

## 高知の都市美100選推薦募集

心なごむ風景・建物を紹介して下さい

昭和六十二年以前に造られた建物や町並みで高知らしい景観を作り上げてきたものを「高知の都市美100選」として選出します。あなたの知っている高知らしい場所、心なごむ風景を推薦して下さい。

- 推薦の対象 高知市内にある昭和六十二年以前に出来た建築物、建造物で、高知の都市美や都市景観の創出に貢献していると思われるもの。(造られた時期は問いません) (例) 住宅、ビル、並木、公園、彫刻、橋、界隈、など
- 推薦方法 自薦、他薦は問いません。はがきに次の事項を記入の上、事業団までお送り下さい。はがき一枚につき何件でも結構です。
- 1、推薦物件の名称、所在地、推薦理由
- 2、推薦者の住所、氏名、年齢、職業、電話番号
- 受付 昭和63年11月1日～昭和64年1月31日 (郵送の場合は当日の消印有効)
- 第5回高知市都市美デザイン賞※ 都市美デザイン賞もあわせて募集しております。これは昭和六十三年中に完成した建築物、建造物を対象としており、はがき一枚に一件を「100選」と同じ要領で推薦して下さい。
- 記念品 「100選」「デザイン賞」の全推薦者の中から抽選により二十名に記念品を贈呈します。
- 応募・問い合わせ 事業団(都市美係)まで

### 朗読公開講座

講師 巖 金四郎さん

昨年、好評をいただきました巖金四郎さんをお迎えして、実技指導を含め、朗読の楽しみ方や指導のポイントなどをわかりやすく教えていただきます。

- 日時 11月20日(日)午後1時～4時
- 場所 潮江市民図書館3階ホール
- 受講料 千円(テキスト代含む)
- 定員 先着百名
- 内容 巖さんのお話・公開実技指導 模範朗読・質問 etc
- 申し込み 電話か葉書で事業団まで

### 市民と留学生の交流会

『ハロー・ワールド』

### 第四回 留学生の見た日本

県内在住の留学生8人の方に留学生の目から見た日本、高知についての簡単なスピーチをしてもらいます。その後、懇談会とバザーを予定しています。

- 日時 11月27日(日)午後1時半～
- 場所 高知グリーン会馆2Fホール
- 参加費 三百円
- 定員 百名
- 申し込み 電話か葉書で事業団まで (バザーに出せる物がありましたら、当日値段を付けてお持ち下さい。)

## 『文化高知』賛助会員募集!!

- 会費 年会費2,000円(一括前納・申し込みより一年間有効)
- 特典 ①「文化高知」の送付(年6回) ②事業団主催事業の入場券や出版物割引(一部例外あり) ③事業や発行物の案内。
- 申し込み ①郵便振替 ②現金書留 ③事業団へ直接……いずれの方法でも結構です。

来年1月号よりあなたのお手元にお届けします。

財団法人 高知市文化振興事業団  
〒780 高知市本町五丁目二番三号  
TEL (〇八八八) 73 四三六五  
郵便振替 徳島 8 1 4 8 6 9